

合同教会の人びと 2

小野寺那仁

マンションのオートロックを瑠奈が面倒くさそうに髪をかきむしりながら開けて、数人が一斉にだれ込んだ。狭いエレベーターに酒臭い息が充満していたのは覚えていたのだがそこから先の静間の記憶は途絶えていた。静間はジントニックをしたたかに飲まされたのだ。葬儀屋が紅い薔薇を一輪、口に咥えていた。鼻の下の髻がビールの泡を含んでいた。部屋に入るなり静間はソファにしなだれかかっていた。瑠奈、葬儀屋、それから他の男たちがいて合計すると五人だった。彼らはコンサートを七時から開いていた。ヘビーメタルといわれるそれは無料で行われることはあまりないのかもしれない。公民館はやさぐれた男女に溢れていた。彼らはいずれもホストとかキャバクラとかマルクス言うところの「仕事とはいえないような仕事」に従事している者たちだった。むろん、他にも古民家やバブルの遺産などを解体する解体屋や保育園の保母たちや新しくできた特別養護老人ホームの介護職員たちもいた。ただ全体的には髪を脱色した地底人のような顔色の悪いホスト・キャバクラ系が多かった。マンションの主であり瑠奈の配偶者でもある木島は、工場の生産管理の監督であり派遣労働者たちから見れば彼らの生殺与奪の権限を握っている神でもあった。実際の木島は例のN大学を二浪して入って途中で留年した劣等生で本社勤務は許されず地方工場に島流しに遭っている。腐れ理系で毎週毎週モーグル三昧が趣味の男だった。静間はその目で眼を覚ました。あの日の夢だった。夢とはいえ現実を完全に模倣しているので果たして夢と言えるかどうか。どちらかといえば記憶であったのだ。ただ自分が眠っているシーンなので自分が見ていた光景ではないはずだ。こうしたことは静間にはしばしば起きる。見たことのない外国の光景などが鮮やかに夢に現れる。読んだことのない原稿を読みふけている。記憶でないものが現われるというのは人間には創造能力があるのだろうか？　だが最後に木島の説明がナレーションのように現れたのは妙な予告でもあった。静間はおそろおそろ分厚いカーテンを開けてみる。まだ明けきらない冬の夜の名残の中で一台の車が排気音と歓声を漏らしながら庭の方に接近してくる。ああ理性が教えたのだ。木島がやってきたことを。

自慢の四輪駆動車から降りてくる木島。携帯をかけている。相手は静間だった。傍らの携帯が鳴った。木島は冬になってから毎週のように現われ、年末になってからは頻繁に顔をみせる。時計を見るとまだ午前五時。気は進まなかったが静間は携帯に出て、スキーに行くのを了承した。真つ暗な部屋の中から手探りでウエアと板とゴーグルを手繰り寄せる。意識はまだまだ朦朧としている。鍵のからまない部屋にいつの間にか木島も来ていて、手際よく、にやにや笑いながら静間のブーツを運び出す。

シーズンになるまではこうではなかった。瑠奈の消えた部屋で幾度となくバリ島での結婚式のビデオを見たり長野五輪での里谷選手や上村愛子選手のビデオを見たりしていた。

モーグルについての話を繰り返した。次第にモーグルコースが充実しつとあると。ウオツカを飲み干す彼は時折離婚協議の進んでいる瑠奈の英会話教室での様子を静間に尋ねてきたのだが彼女はもうそこにはいなかった。ほぼ同時期にカナダに転籍してしまったからだ。つまりは静間との関係は途絶えたはずだったのだがほかに知りあいいいなのか木島は静間に依存していた。いや女性の知り合いはかなりいたはずだったのだが。そうして木島が葬儀屋たちと瑠奈をマンションから追い出して三カ月ほどたって離婚は成立した。署名捺印された用紙がエアメールで返送されてきた。それを携えた木島と焼肉屋で会食した時など彼は泣き喚いていた。宥めるのに静間は苦労した。それからしばらくして木島は瑠奈とはお互いの生活には干渉しない契約の下で結婚したのにあの日彼女を部屋から追い出したのが離婚の原因になったと打ち明けた。木島のビッグスマイルは彼のスポーツマンらしい大柄な体格にも比例して大きな武器になっていた。彼は既に三十半ばも過ぎていたにも関わらず十代二十代の女性にもかなりの人気であったのだ。それは居酒屋でも証明されて彼は女性によく声を掛けられ一緒に飲み始めることもしばしばあった。だがそうしたもろもろも何故か瑠奈にはいっこうに通用しなかったのであった。いや、それともなんだろうか、瑠奈も一時的には木島に惚れたのではあったが結婚してみると彼の性格にうんざりさせられたのかもしれない。瑠奈とはもう何シーズンもスキーには行ってないと口惜しそうに彼は言うのだが、はたしてそうなのだろうかと静間は訝しんだ。それとは逆にロックからヘビメタルへと変わっていった彼女のボランティアのコンサートにも木島は数年間一度も見にいかなかったという。

離婚当初は落ち込みがひどく、静間を呼び出しては未練を縷々と語っていたが次第にビッグスマイルに輝きが戻るが多くなった。この頃はすっかり吹っ切れたようでもあった。それでも静間を彼は必要としているらしかった。

階段を降りている途中も今日は断ろうかと思ってくらいに前日の酒が残っていた。連日の忘年会で部長たちと飲み歩いてきたのだ。考えてみれば三時間くらいしか眠っていない。夜更けには携帯の電池も切れていた。その頃におそらく木島から連絡があったのだろうが気が付くこともなかった。

「今日も誰か来てるの？」

「ああ、君ももう瑠奈には会わないんだろう？ だったら誰と会おうが文句は言われなからな」

「いや、離婚してるのなら文句は言わないでしょ」いきなりだ。静間は自分の意志と無関係に木島のペースに乗ってしまった。瑠奈：そうか木島は瑠奈が戻ってきたことを、まだ知らないのか。静間は彼に打ち明けるべきかどうか迷った。記憶の底に沈んでいたクリスマスパーティーの誘いもほんのりと浮かび上がってきた。そういえば瑠奈は木島を誘ってくれと言ったわけ。クリスマススイブの日だっただろうか？ もう日にちさえ定かではない。春子の言ったカルトという認識、それは静間にも共通していた。過去に宗教がらみで教団の事務所みたいなところに連れて行かれたことは何度もあった。仏教、キリスト教が多

かったがそのほとんどが新興宗教であり、正式で由緒正しい雰囲気がするところには行ったことはない。せいぜい祖先の墓のある菩提寺くらいか。そういうところは見ず知らずの人を街頭で勧誘などはしないが、では入信してないかと言うとそうでもなく、すでに先祖が入信しているのだから子孫も勝手に入れられているわけだ。入れられてはいるが彼らは死後弔ってくれるだけで生前には関与してこない。死に際して苦しんでいる最中に坊さんが現われたらたいいの日本人ならば怒るだろうし、仏教的世界観や輪廻なども信じてはいない。ただ今の会社制度はコンビニ並みに洗練されていて何に対しても手際がいい。そして金銭がかかる。それだけで煩わしい観念的な不安を拭い去ってくれるようなかわししさはある。

そういう背景があるから新興宗教はカルトに思えてくるのだろう。静間もまた無意識にそう感じていた。瑠奈のことを絡めてもまた木島が落ち込むことが予想されてやはりパーティに行くのはよそうと決めた。

「まあなんとするか会社の女の子たちだよ」木島は静間に紹介した。

「めぐみちゃんとあおいちゃんとあきなちゃん」

二十歳前後だろうか、なにか生き生きと生きていて明らかにテンションが違うなあと静間は感じた。

「お疲れモードですねえ」リーダー格のめぐみちゃんは言う。彼女はすでに知っている。前回も共に滑ったからだ。だんだん人数が増えてくる。この頃のウェアは地味であって機能性を重視している。静間は彼女たちのウェアと自分のそれを見比べている。

「ウェアはバブルモードですよね」そういつて静間の服をつまみながら笑い転げると他のふたりも笑った。あおいちゃんは一瞬目が合うと視線を宙に浮かせて横を向いた。人見知りするのもかもしれない。手慣れた木島は車の上部に備え付けてあるスキー格納のボックスに静間の板を括り付ける。木島に薦められて買ったその板は十万円を超えブーツは六万円だった。静間には痛い出費であったが持っていたIT企業の株が値上がりしたので高値で売って利益で買った。

木島がそわそわしているので静間たちは急いで車に乗り込んだ。宇多田ヒカルの曲が流れる中、車はできたばかりの高速道路を疾走する。彼女たちは宇多田というまだ高校生の洋楽じみた曲をあれこれ揶揄していた。静間は母親の藤圭子のほうが詳しいくらいだ。子供の時に強烈な印象を受けた。完全に大人の世界の唄であったから。彼女たちの話とはめどなく木島と会社をめぐるものになっていった。静間はそう感じられた。助手席に座っためぐみが車内を仕切っていた。静間は置いてきぼりを食らい、携帯をいじっていた。着信はほかにもいくつか見られた。ただ日曜日だからすぐには掛けなくてもいいだろうぐらいに考えていたが、見知らぬ番号が複数あった。そういったものでも顧客かもしれないので面倒ではあっても一応は今日中に掛けておかねばならない。しかし携帯と言うのは何度も着信があってもひとつしか痕跡を残さないものだと静間は思った。ちよっと前の留守番電話などはいくつも着信が積み重なって録音しきれなくなっていると相手の執念の凄まじ

さから再生するのも嫌になつて聞かずに消去してしまうこともあつた。そうしてその中に女性の友人の着信が混じつていてあとから話のツジツマが合わずに苦労したこともあつた。あれから何年もたつていないのにえらく時代は変わつてしまつた。今ではポケベルを使う大人はいないし、高校生ですら使わなくなつてきたようだ。

「え、あんたつてまだ高校生なの？」めぐみが大きな声をあげる。指されたのはあきなだつた。それから腕をまくつて肌のきめこまかさを調べたり髪の色艶に感嘆したりといろいろ喧しかった。その最中の事だ。まだ六時になるかならないかというのに携帯が鳴りだしたのだつた。

「もしもし、静間です」声を潜めた。しかし大声で女子たちが喚いている中でこちらが声を潜めたら喚き声が相手に届くだけのことであつた。相手は何かぼそぼそとつぶやいているのだがほとんど聞き取れない。昨日も着信のあつた番号だつた。

「もつと大きな声で言つてくれなかつたら聞こえませんかよ。すみませんが」

「高橋です」

「えつとどちらの？ Sankyōさん？」取引先にいるのだつた。

「いえ、侑ですよ」

「ゆう？ 間違いなんじゃないんですか？」考えてみれば取引先の高橋なら登録済みだ。すると電話はあっさりと切れた。やはり間違い電話かと静間は思った。

「何、真面目ぶつて仕事してるんですか？ はい、朝ご飯ね」めぐみはコンビニで買ってきたらしいピザまんを渡してきた。運転中の木島にも「はい、まーくんお口を開けて」とピザまんを食べさせている。すると今度はこのコンビニのあんまんが美味しいだとかピザまんが美味しいだとかいう話になつて静間はついていけない。だが木島はいろいろと知つていて彼女たちのツボを心得ているようだ。

「で、さ、まーくん？ なんで高校生がいるの？ あきなちゃん」

「あー、パートのおばちゃんのおかまさんの娘さんなんだよ。忙しくて遊びに連れていけないからよろしくねつて。たまたまスキーの話になつてね。彼女、小さい頃はよく行つてたのに最近は全然だからね。不景気だから。おかまさんにはいつもお世話になつてるからね」

「そういうことなの。それじゃ気にしなくてもいいのね」

「なんだ、キミ、だいぶ仲良くなつたみたいじゃないの？」おもむろに静間が言う。

「仲いいわよ、昔から」

「あおいちゃんとはどういう関係なわけ？」

木島はそれには答えない。あいかわらずあおいは静間には愛想が悪く彼の方は見ない。

「なんだ君たちみんな初対面なのか？」

「それぞれまーくんとは知りあいみたいだね」

「まあいいんじゃないの。おいおいわかるさ」木島の運転は乱暴になつた。彼の心情はすぐに運転に反映されるのだ。

それから小一時間高速道路を木島は飛ばし続けた。隣にいるあきなが高校生と判ってから静間は話す気が失せてきた。年齢が離れすぎていて何を言っているのかわからなかった。いつしか軽く眠りに落ちていた。

到着して脱衣所で着替える時、木島とふたりだけになった。

「あおいちゃんとはどういう関係なんだ？」

「いや、なんというか」

「彼女愛想が悪いよなあ、俺には」

「そうかな、南さんは人見知りするかもしれないな。でも綺麗な子だよな」

「正直、若い子は苦手だな。あまり話が合わないよ」

「でも独身なんだから頑張らないとな。それに南さんはそんなに若くないよ。もう二十八歳にはなってるんじゃないかな」

「南？ ミナミ？ みなみ？ その苗字は変わってるから俺の同級生の妹かもしれないな。家どこなの？」

「空港に架かる新橋の近くだよ」

「ああ、やつぱり」

「島あるじゃない？」

「島だって？」

「ああ、無人島さ。あそこはスキューバダイビングの穴場なんだよ。伊勢海老が泳いでいて食えるって話だよ」

「嘘だろ！」 静間は笑い飛ばす。

「お前の南が友人の妹だっていうのもあてにならないよ。南って苗字は意外にいるんだぜ」
「まあいいよ。黙ってるよ。あまり遊んだことのない友人だからね。だけど空港の近くは近くなんだよ」

「彼女たちとはK駅で待ち合わせた、レンタルスキーだから電車の始発で来たんだよ」

「じゃあ、何で家を知ってるんだよ」

「あー彼女は俺の部下なんだよ。だけど瑠奈のことは黙っていてくれないか。うちの会社では瑠奈は禁忌（タブー）だからね。離婚したことも誰にも話してないよ。それからめぐみにももちろんな」

「めぐみってどこで知り合ったのだったけ」

「居酒屋じゃないか？ 忘れたの？ お前もいたぞ、あの時」

「それなら瑠奈のことなんか知ってるに決まってるじゃないか！」

「俺の妻をなれなれしく呼び捨てにするなよ」 木島は笑いながら言った。彼は上機嫌だった。「めぐみと付き合うのか？」

「さあね」くすんでいた朝の空は次第に晴れて日が照りつつあった。

何やら叫んで木島は脱衣場からスキーを履いて滑り出して行った。静間は他のメンバーと同じく板を担いでリフトまで歩いて行った。動かないと寒くなってくる。木島とはぐれ

ると他の三人は人ごみに紛れてわからなくなってしまうそうだった。ゴーグルをつけているので顔もはっきりしないし、ろくろく顔も見えていない。静間は少し慌てて木島を追うがひたすらにすべりたい彼は次第に雪と風の狭間に遠く消えていく。

「バブル仕様が役に立ったわね」めぐみが言った。

「もう行ってしまったよ。木島」

「あの人、ああいうひとよね」他のふたりは地藏のように立っている。初心者のようにであった。四人はのろのろとリフト券の販売所まで雪を掻き分けて歩くのだった。スキー場によつてはロッカールームからかなり遠く、だが斜面ではないから滑るわけにもいかず歩いて行かねばならない。あきなはそれでも目を輝かせていろいろ珍しそうに眺めていた。

「おかあさんが木島さんに惚れてるの」話の途中から静間の耳に届く。

「それでね。お嫁さんにしてもらったらなあんて言うのよ」

「ははは」めぐみは一笑に付した。このふたりは南あおいが木島の部下だなんて知らないだろうなと静間は思った。

「だったらスキーを上達させなくてはいけないね」

「がんばらなくては」

「じゃあ、あたしが教えてあげるからね。静間さんはあおいさんの方を頼むわ」

一瞬、あおいが躊躇いと戸惑う表情を見せた。

「いいいえ、私ひとりで滑りますから」

「だめよ。はぐれたら本当にわからなくなってしまうのよ。わたし、先週はぐれて大変だったんだから」めぐみがそういうのでつい静間も口に出した。

「そうそう。木島はマイペースだからひとりで滑っていて隣のスキー場に行ってしまったよ。探すのに苦労した。携帯で連絡し合うとしてもね」

「ええっ」それから四人は携帯の番号を教え合った。

「私、煙草吸う人は苦手なんですよ」あおいははっきり言う。静間が煙草を吸っていたのを見ていたようだ。

「ごめんね、じゃあ君の前では吸わないようにするよ」

「あ、本当に私、ぜんぜん滑れないわけじゃないんで大丈夫です」あおいの作り笑いは苦しげで静間とは関わりたくないのは明白だった。勝手にしろよと静間は思った。

めぐみとあきなは第一リフトに向かっていく。そのリフトはペアリフトだった。4人掛けにしようと静間は思ったが、わざわざ遠くのリフトまで初心者を変更するはずもなかった。長い列ができていく。なんとか四人は辿り着いた。到着するまであおいは何度も転んで雪まみれになっていた。静間たちは彼女を待たために足を停めているのにあおいは相変らず不機嫌そうな表情を浮かべるだけであった。その顔を見た時に軽い寒気が背中に走った。おそろしいくらい美しい顔立ちであった。どこかで見たような……それもそんなに遠い過去ではなく。似ていると言えば、そうだ、英会話教室で瑠奈に叱られていた子に似ている。背格好もそっくりじゃないか。たぶん、いや、きつとあの子だろう。だが確信は

もてないままだった。

めぐみとあきなは微笑みあつてずっと話し込んでいる。それにひきかえ静間とあおいは沈黙を続けたまま距離を置いていた。順番は徐々に迫っていた。ようやくあおいはペアリフトに気が付いて露骨に困惑した表情を浮かべた。めぐみはあきなの手をひいて難なくリフトに乗る。いよいよ次は静間たちだったが、手を引くわけにもいかず立ち竦んでいた。箒を持った地元の老人はリフトのシーートの雪を払っていたがとうとう無人のリフトが上がつて行くのを見るといきなり近寄ってきた。

「何してるんだ」

「すみません、初心者なんで足がすくんで」

「あんたが？か」

「いえ彼女が」あおいをストックで指した。

「よしわしが手伝ってやる」

「何、してんのよ」後ろの関西弁の男女が騒ぐ。

次のリフトが近寄ってくるど老人はすばやくあおいの背後に迫ってオシリの肉を掴むようにしてリフトまで押し出してきたのでぎゃあとあおいは叫び声をあげた。そのタイミングを逃さず静間はペアに乗った。老人は高らかに笑っていた。

「セクハラされた」

「え、しようがないよ。空いているリフトは無駄だからね」リフト係りの老人は仲を取り持つサービスマスもしているのかもしれない。

「あんたが初心者なんていうからじゃない」

「キミってさ、瑠奈先生のクラスのあの子だよ」

「何をいまさら言ってるんですか！」

「え、知ってたの？」

「当たり前じゃないですか。あたしビックリしてたんですよ」

「そういうことだったんか。ところで、これはヒミツだけど瑠奈先生は木島の元妻だよ」

「ええええ！ 知らなかった！」

「だから瑠奈先生の話を木島の前ではダメだよ」

「なるほど」

「それともうひとつ、俺の同級生が刑事なんだけど南っていうんだけど、キミって妹さんなの？」

「いえ、それは違いますよ、年齢が違いすぎるじゃないですか」

「あ、そうか」

「伯父です」そうだったのか。

「でも教会で顔を合わせるくらいですよ」

「教会って？」

「合同教会です。母が熱心な信者なんです。日曜礼拝には欠かさず行ってますよ」

「どうして？」

「どうしてって言われても。家が近いからとか先祖もそうだったからじゃないの。わたし、あそこも好きじゃないですよ。いろいろありましてね。瑠奈先生もバンドから入って今じやかなりのめり込んでるみたいですね」

「この前も薦めてたよね」

「ええ。行かないですよ。私はあそこでは異端児です。異端教徒を集めた中での異端児です」

「英会話も」

「そうそう、あそこも母がくれたんですよ。私は全部、おかあさんの敷いているレールに乗っけられて」

「いろいろ大変ですね」

「いい加減自分の意志で生きてみたいですよ。木島さんも強引でしてね。もう、なんか、イヤなんですけどね。セクハラみたいなものですよ。本当に。俺の部下になったからにはスキーは必須だとか言い出して。スキーの有給を取るために私を巻き添えにしたんですよ。部署でスキーに行くようにしたら上司の許可も下りやすいですって。それで来てみればほったらかしですからね」

「煙草苦手なの？」

「いえ、べつに。ずっと静間さんが私のこと軽蔑してると思ってたんですよ。あの英会話の件で。だからイヤだなんて思ってただけ」

「ああ、英語は俺もできない。ぜんぜんダメなんだ」

「でもそれ以上に私だめだから」

リフトが到着するときに静間は手を差し伸べて上手く降りることができた。そこから四人乗り、ペアと三つのリフトを乗り継いだ。頂上に着いたあともしばらく滑らずに話していた。

(連載二回分)